

## インターネット時代の 電子情報通信学会

調査理事 安達文幸



会員数が減少している。海外会員数が増えているが企業に所属する会員数の減少が影響している。また、研究会では企業の発表が減り、大学の発表が増えている。インターネットが普及した今、わざわざ研究会や大会に参加しなくとも最新の研究情報を簡単に取得できるようになった。インターネット時代の学会の役割とは何かについて日ごろ考えてきたことを書き連ねてみたい。

インターネットが普及した今だからこそ、インターネットを超えた“人と人との実社会レベルでの強いつながり”が必要になっている。学会は知の共有の場であり、査読なしで研究発表が行える研究会が毎月多数開催され、企業人と大学人が知の共有を図ってきたところに本学会の価値がある。査読なしということは、新しい考えを紹介し、皆が議論して新しい考えを共有しようということだ。直接、発表者に会って議論することは、論文を読むより深い議論と知見が得られ、更にアイデアを飛躍できる。研究会や大会への学生の参加は、発表の仕方、聞き方や質問の仕方を学ぶことができ、学内のゼミより大きな刺激になる。また、企業が何を考えどんな技術動向にあるのかを知ることでもできるし、企業の先輩たちとの議論、厳しい質問や貴重な示唆は学生の学力だけではなく、討論力や人間力の涵養にも大いに貢献している。本学会は大学教育にも大きく貢献してきた。それが今、変わろうとしている。

企業を取り巻く経済情勢の厳しさが影響し、長期的な研究開発より標準化会議などを対象とした即効的な研究開発が中心になりつつあることが、企業に所属する会員数が減少し続けている原因だろう。大学は知の集合体、企業は開発を中心にした技術の集合体。これらを結び付けるのが本学会だと思う。お互いに刺激・協調できればお互いが更に発展できる。限られた分野を掘り下げるだけでなく幅広い分野も知ることが今後必要になる。これには本学会の研究会や大会は大いに役立つ。インターネットを超えて大学の教員、学生と企業の研究技術者が集まり、基礎技術や知の共有を図り、学会活動が企業人にも貢献し、未来の企業人となる学生を育てるために何をすればいいのか。技術はかなり進歩してきた。これまでは技術力という一つの価値のもとで製品開発が行われ、本学会もそれに大いに貢献してきたが、技術的に優れたものが生き残るとは限らないという現実がある。人間社会にはデザイン、価格、操作性、流行など技術力以外の価値基準がある。学会の場で社会科学的視点から技術について議論を行う時期にきている。また、研究助成金申請では大学と企業との共同提案を必須とするような取組み作りを推進するのも一案だと思う。

本学会のグローバル化も大事な目標である。インターネットが普及した今だからこそ、学会もインターネットを超えて実社会レベルでの世界との強いつながりが必要になる。多くの留学生が研究会や大会に参加して議論できるような企画をするのも一つの方策であろう。出身国が違えば考え方も違うはずで、そこで議論すれば新しいアイデアが生まれる。また、論文誌の国際化とその認知度を高めることも大事だ。本学会の英文論文誌には海外からの論文が増えている。しかし残念なことに、海外セクションの代表者から「インパクトファクターの高くないジャーナルへは投稿しない」という意見を耳にした。国際色豊かな英文論文査読者の増加は、本学会の国際的認知度を高め、海外からより多くの投稿を呼び寄せ、ひいてはインパクトファクターを向上させる一歩になるかもしれない。本学会の海外会員数、投稿数の更なる増加に向けて議論を重ねてゆきたい。